

所信表明

二〇二三年度学園振興委員長選挙所信表明

学園振興委員長候補

理工学部 三回生

桑原大空

この度 2023 年度学園振興委員長に立候補いたしました、理工学部 3 回生の桑原大空と申します。本所信表明にて、立候補の経緯、私のこれまでの活動を通じて感じてきたこと、来年度において目指す方向性について述べていきます。

【立候補の経緯】

私は今まで行ってきた学友会活動に魅力を感じています。学生が主体的に活動を行い、大学側と山積する課題について議論を行い、解決に導くことができるという魅力です。おそらく、学友会活動に対して魅力を感じている学生は年々減少していると考えられます。なぜなら学

友会では何年もの間、主体者不足や自治意識の低下が課題として叫ばれてきたからです。学生が要求実現運動をはじめとした学友会活動に魅力を感じていたら、このような課題は生じないはずです。では、『学友会活動の魅力』を高めるために我々は何をしたらよいのでしょうか。私は今日までの活動を通して、①「学生自身が抱える課題感が『解決されたという実感』を得られることや『解決の兆しが見える』こと」、②「学生自治を主体的に担う我々の活動の高度化」が重要であると考えました。この二点を達成するために、私は来年度の学園振興委員長に立候補させていただきました。では、次にこの二点を具現化するための方向性を述べさせていただきます。

【方向性】

先述した二点のそれぞれに関して、来年度の学園振興委員会の方向性をお示しします。

- ① 学生自身が抱える課題感が『解決されたという実感』を得られることや『解決の兆しが見える』こと
- ② 学生自治を主体的に担う我々の活動の高度化

①

学生の課題感を解決するには、大学との懇談が必要不可欠です。しかしながら、既存の懇談会には限界があると私は感じています。例として学部単位の五者懇談会を考えると、複数の学部に関連した要望をはじめ、学部単位では解決できないものは五者懇談会の議案として提起しても解決へ導くのは困難です。しかし現実問題として、各学部のアンケートには学部単位やキャンパス単位では解決できない要望も多く寄せられています。このような要望を解決しないことには、学生の抱える課題感を完全に解決することは不可能です。また、単に要望自体を解決するだけでは不足と感じています。その根底には何があるのか、そもそもどうしてそのような要望が生じてしまったのかといった「問題の本質の理解」を行う必要があります。したがって、そのような要望の本質を議論する場を積極的に設け、学生の抱える課題の本質解決に向けた活動をすることを方向性の一つとします。

②

学生の課題感を解消するために必要なのは、我々中央

パート所属の学生が大学との協議に「参画」することで
す。「参画」とは、「学生の抱く課題感の解決を目指す」
ために我々学友会が行う活動を指しており、学生自治を
体現する代表的な活動の一つです。では、先人たちはど
のような活動を行っていたのでしょうか。それを示すの
が学友会に保管されている過去資料です。我々は活動す
るにあたって困難に直面したとき、同じ団体に所属する
周囲の学生と共にその困難を突破する術を議論します。
周囲の学生とはつまり、物事を見る視点の数です。その
視点は多ければ多いほど打開策を見出せる可能性が高く
なり、時には通常考えつかないような突拍子もない案が
提案され、それが意外な好結果を生み出すこともあるこ
とを我々は知っています。過去資料は、その視点を増や
すために非常に有用であると考えています。その場に先
人たちがいなくても、その資料が先人たちの視点の代わ
りとなります。つまり我々が過去資料を有効に活用でき
れば、学友会活動の更なる高度化が見込めます。したが
って、現在倉庫等に保管されている資料を整理し、必要
な時に閲覧・貸し出しを可能にするといった環境の整備
を行うことで、我々の活動の高度化に繋げることを方向

性の一つとします。

【これまでの活動について】

ここでは、私のこれまでの各団体での活動を通して感じたことを述べます。

〔自治会〕

私は学部一回生の春に理工学部自治会に入会しました。自治委員として、五者懇談会におけるアンケート分析や議案の検討等に参加しました。このとき、自治会というのは大学側に直接学生の意見を伝達し、それを基に議論を行える団体であるということに、驚いたと同時に魅力を感じました。

二回生と三回生では理工学部自治会の委員長として、先輩方のお力添えをいただきながら自治会の運営を行いました。多くの学生からの多種多様な意見を収集し、理工学部生の課題感を解決するためにはどうしたよいか、理工学部生が快適で充実した学生生活を送るにはどうしたらよいかを常に模索しながら活動してまいりました。それと同時に、五者懇談会で提起しても解決できない議題

や、そもそも扱うことすら難しい議題があることを知り、活動に限界があることを痛感しました。また、果たして自分達の活動はこれで良いのか、先輩方の代はどのような活動を行っていたのかを知りたくなりました。それを知ることができれば、新たな課題解決の糸口を見出せるのではないかと考えたからです。

三回生ではさらに全学自治会にも所属し、活動を行ってまいりました。全学自治会では理工学部自治会よりも少し大きな視点で、BKC所属学生が共通して抱える課題を解決するために活動してまいりました。直近ではBKCの各学部自治会と連携し、BKCのキャンパス懇談会開催に向けて課題の整理等を行っております。この活動を通じて、他学部自治会も同じように五者懇談会等で扱えない課題があること、継続して提起しているのも関わらず解決の兆しが見えない課題があることを知りました。このような課題を解決しなければ学生の課題感は解消されることはないと考え、新しい形で課題解決のアプローチを図ることの重要性を認識しました。

〔学園振興委員会〕

三回生では学園振興委員会にも所属し、全学的な課題の解決に向けた活動を行ってまいりました。三月頃から過年度のアンケートや見解文書、RSや各部懇談会議事録を用いて勉強会を行い、今までの学友会がどのような事項を要求し、どのような合意や議論がなされたのかを勉強しました。全学アンケートの作成段階においては、長期間にわたって学生の想いを汲み取れるようなアンケート内容を考え、アンケート回収が完了した後は、SPSSやエクセルを用いて学生がどのような課題を抱えているのかの傾向を詳細に分析しました。これらの活動を通して、過年度に大学側と話し合った課題がまだ課題として残っていること、環境等の変化によって新たな課題が生まれ続けていることを実感しました。

現在は、全学アンケートから見出せた学生の抱える課題感を整理し、それらを解決に導けるような懇談会等の開催に向けて準備をしています。今まで扱いに苦慮した要望に関して、学生と大学側と懇談する場を設けることで、学生の課題感を少しでも解消できるよう取り組んでいます。

【最後に】

私は立命館大学学友会をさらに魅力的な団体に変えた
いのです。中央パートに所属しない学生にとっては、学友
会は自分達の学生生活をよりよくするために活動してい
ることを実感してもらえらるような、また中央パートの
我々はそのような学友会活動をしていることに誇りを持
てるような団体にしたいと考えています。そのための活
動を担うのが学園振興委員会であり、私はこれらの目標
を胸に掲げて来年度の学園振興委員会の活動を委員長と
して誠心誠意取り組む所存です。どうぞ、よろしくお願
いいたします。

投開票日 二〇二二年一月二七日

二〇二二年度立命館大学学友会選挙管理委員会

同中央常任委員会